

JAMの主張

田中ひさや当選へ奮起せよ 連合のだ真ん中に中小労働運動

機関紙JAM 2017年9月25日発行 第224号

8月31日、9月1日の両日、JAMは第19回中央定期大会を開催し、向こう二年間の運動方針を可決し、同時に、私が第六代会長としてご承認をいただき、思いもよらぬ大役を引き受けることとなった。

この運動方針はJAM結成20周年に向けた最後の二年間の方針であり、これまでの二十年間の集大成を示す方針である。このような節目の年の運動方針を執行する責任者に任じられたのは非常に光栄であるとともに極めて重い責任を感じていることも事実である。

歴代会長が掲げてきた高い理想と運動の歴史を引き継ぎ、「中小労働運動を連合運動のだ真ん中に据える」ために粉骨砕身、努力を重ねていきたい。

しかしながら、課題は山積している。何よりもまず、田中ひさや組織内候補予定者を国会に送らなければならない。これは決して負けられない闘いであり、組織の存亡をかけた闘いでもある。これまでと同じ運動をしていては当選を勝ち取ることはできない。藤川前候補者が勝ち得た113,000票では残念ながら当選させることができないことは既に証明された。志を同じくする他産別との連携も極めて重要ではあるが、それ以上にJAM自身がその組織力を強化し、票の上積みを図らなければならない。

JAM本部としても、藤川選挙における課題を徹底的に洗い出し、新たな運動を構築する覚悟ではあるが、それぞれの地方JAMの奮起、あるいは加盟単組のより一層の団結と行動をお願いしたい。JAMの底力を世の中に見せつける気骨を持たなければならない。どうすれば運動が票につながるのか？結局のところ日常の活動を地道に重ねていくしかないと考えている。

1999年11月5日、私はJAM四国青年女性協議会初代議長として中央青年協議会結成総会に参加していた。この総会では服部光朗初代会長の記念講演もあり、「日本は、明治維新・敗戦と二回の大きな開国があった。維新や戦後復興の原動力となったのは輝く目を持つ若者たちであった。元気のない今の日本の中で、三度目の開国を果たす気概をもって頑張ってもらいたい」と檄を飛ばされた。その思いに少しでも応えていきたい。

JAM 会長 安河内賢弘